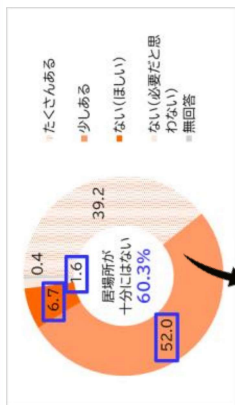


(4) 子どもの居場所のニーズ

① あなたにとって、ほっとできる場所、「ここにいたい」と感じる場所がありますか。(子どもアンケート)



●約6割の子どもが居場所が十分にはない学年別で見ると、小学生・中学生・高校生と、年代があがるにつれてたくさんある「の回答が減少しています。

●子ども部屋(きょうだいと共有含む)がない子どもが約半数で、特に高校生は約25%い子どもが約半数で、特に高校生は約25%

都市部特有の住宅事情がうかがえます。

② あなたにとって、ほっとできる場所、「ここにいたい」と感じる場所は次のうち、どれですか。(①で「たくさんある」に答えた人のみ/3つまで回答)(子どもアンケート)

1位 家(自分の家や、祖父母・親戚の家など) 89.0%

2位 学校の教室 29.2%

3位 図書館 16.2%

カードブレイスとは?

家(ファーストブレイス)や職場・学校(セカンドブレイス)とは異なる、第3の居場所。ストレスから解放され、自分にとって居心地の良い場所

●学校や家以外のカードブレイスを持ていない子どもが約3割

「家」「学校の教室」「教室以外の学校」「インターネット空間」のみを選択した子どもは32.0%となっています。また、「学校の教室」を選択した子どもは29.2%、「教室以外の学校」を選択した子どもは14.9%となっており、学校が一日の大半を過ごす場所でありながら、安心して過ごせる居場所になっていない子どもが多いことがわかります。

●居場所の数が少ない子どもは約4割弱

子どもの居場所は、成長や環境の変化により、変わりやすいく失われやすいといわれています。※が、居場所として選択した回答が2つ以下だった子どもは37.4%となっています。

※子ども家庭審議会「子どもの居場所づくりに関する指針(答申)」(令和5年12月1日)参照

(5) 子どもの居場所として求められている機能

① お子様の学習や進路に関して、どのようなサポートがあればよいと思いますか。(3つまで回答)(子ども・保護者アンケート)

上位3つ	
保護者	1位 家・学校以外で勉強に集中できる場所 58.2% 2位 体験学習(芸術文化・ビジネス体験など)ができる機会 53.5% 3位 勉強で分からない部分を学び直せる場所と教えてくれる人 45.9%
子ども	1位 家・学校以外で勉強に集中できる場所 62.2% 2位 勉強で分からない部分を学び直せる場所と教えてくれる人 50.6% 3位 体験学習(芸術文化・ビジネス体験など)ができる機会 35.0%

●保護者・子どものどちらも「家・学校以外で勉強に集中できる場所」が最も高い。

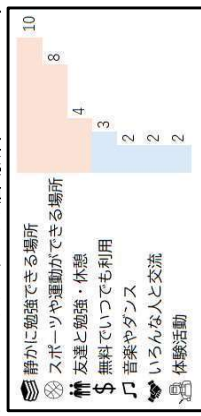
子どもアンケートも上位3つは同じ結果でしたが、保護者とは2位・3位の順番が逆の結果となりました。

② 千代田区で、家や学校以外の新たな子どもたちの居場所をつくるとしたら、やってみたいことや、こうしてほしいという意見を教えてください。(自由記述式)(子ども・保護者アンケート)

●子どもから最も多く求められている機能は「静かに勉強できるスペース」

その他、スポーツやボール遊びができる場所のニーズが高いこともわかります。

▼あなたがほしい、こんな居場所(ワークシヨップ)

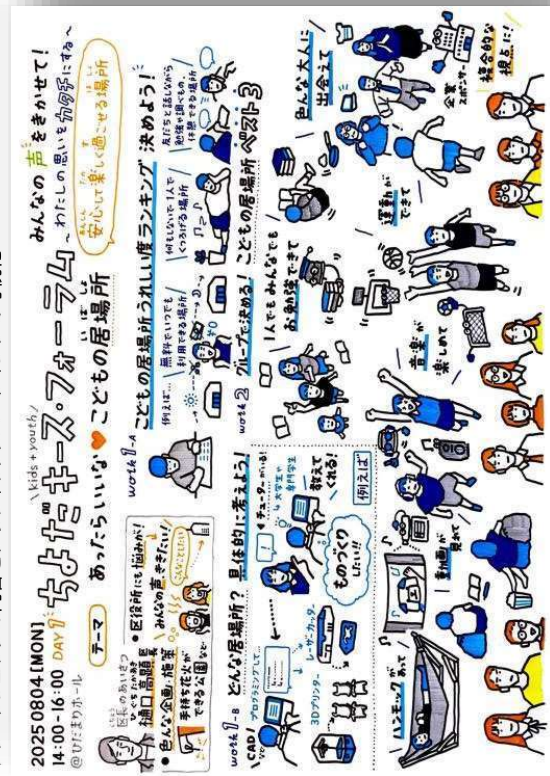


※1位:3ポイント、2位:2ポイント、3位:1ポイントとして集計

●保護者は、大人の関与を求める声が多い。

子どもの安全を見守る大人がいることを求める回答が多いほか、勉強を教える人や体験学習のサポートなど、さまざまな面から大人の関与を求めています。

▼ワークシヨップの内容をグラフィックレコーディングで可視化



※生成AIにより自由記述意見を分類、可視化

4 今後の方向性

(1) 区から子どもへの情報発信

子どもに届けるツール(方法)について充実させる

- 区の情報発信ツールは、「広報千代田」が子どもにもよく見られているが…

一方で、主に大人向けに作成されている「広報千代田」は例えば小学生が読むには内容や文字が難しい場合があります。そのため、子どもに情報を届けるにはその内容についてわかりやすく作成する必要があります。

【他自治体事例：新宿区】「新宿区キッズページ」の開設

新宿区は、子ども向けのHPとして、「新宿区キッズページ」を開設しています。「新宿区キッズページ」では、区が開催するイベント、遊び場など、子どもが求めていると思われる情報のみ抽出し、やさしい言葉・表現とイラストでわかりやすく紹介しています。



参考：新宿区：キッズページ

【他自治体事例：愛知県春日井市】「子ども広報春日井」の配付

愛知県春日井市では、小学4年生から6年生及び中学生を対象に、市政情報などをわかりやすく編集した広報誌「子ども広報春日井」を年2回作成しており、各小中学校を通じて配布しています。「市の歴史」等の掲載を通じて、地域に関心を持ってもらうだけでなく、「防災」、「デジタル」等をテーマとしたページを設けることで、子どもが時事問題に関心を持つきっかけづくりに寄与しています。



参考：子ども広報春日井 | 春日井市公式ホームページ

子どもに届ける情報について選別する

- 子どもにとって、興味・関心が持てる内容であることが重要

アンケート、ワークショップを通じて、子どもは「遊ぶところ」や「イベント」「災害対策」、「環境」、「交通・防犯」、「選挙・議会」、「税金」の情報を必要としています。自分にとって身近な事柄や最近授業で学んだことなどに関心のある傾向が読み取れます。

区が上記の内容について発信する場合は子どものニーズと合致するので、積極的に子どもにも提供していく姿勢が求められます。

【参考事例】地域コミュニティアプリ「ピアッツ」

子どもや保護者の欲しい情報として「地域のイベント情報」がありますが、こういった情報は必ずしも区が主催するものに限りません。そのため、そういった地域限定情報は区ですべて把握することが難しく、適切なタイミングでの発信は難しくなります。

ピアッツは、地域の人々で暮らすに関する情報をやりとりしたり、「ちょっと困った時に相談しあったり、使わなくなったモノを必要としている人に譲ったり。この地域をもっと知り、みんなとつながることで、私たちの暮らしはもっと楽しくなる地域コミュニティアプリ」です。23区でも中野区、世田谷区、荒川区など広がりを見せており、アプリ内で様々な交流が行われております。

参考：地域コミュニティアプリ：ピアッツ

- 子どもはスマートフォンなどの電子機器の利用に抵抗が少ない

近年SNSが普及し、多くの子どもがスマートフォン等の通信端末を所持している中で、SNSは区が子どもに情報を届ける手段として非常に有効と考えます。

しかし、区のSNSは認知度がまだ低く、認知度の向上や子どもたちの情報ニーズを踏まえた発信をしていく必要があると考えられます。

また、SNSを利用するにあたり、意図しないかたちや内容で子ども等に伝わってしまうリスクがあるため、利用方法や発信内容・表現については慎重に判断していく必要があります。今後も区と子ども双方で情報リテラシーに留意する必要があります。

【他自治体事例：京都府京都市】京都市子育て応援インフルエンサーの任命

京都市は、子育て世代への情報発信を強化するため、「子育て応援インフルエンサー」を任命しています。市内で子育てに関する発信を行うインフルエンサーが、市の子育て支援情報や施設、地域の魅力を自身のSNSで紹介することで、行政の発信だけでは届きにくい層にも、親の視点で共感的に情報を伝えることを目的としています。



参考：京都市：京都市子育て応援インフルエンサーの任命

4 今後の方向性

(2) 子どもから区への意見発信

子どもが区に意見を発信するツールについて

- 子どもが区に向けて意見を発信しやすいように、オンライン・オフラインによる様々な環境を整える必要性

子どもは意見を伝えやすいツール(方法)について「アンケート(web)」を選択しており、子どもは意見を伝えるにあたり匿名性や、通信機器等を用いて時間や場所問わず意見を伝えられる気軽さを重視しているといえます。

また、「直接話す」など区との双方向のコミュニケーションを求め、一定数あり、ワークショップ参加者からも友人やファミリーデーターとコミュニケーションを取りながら意見を伝えることを有効な手段としています。

そのため、多くの子どもが意見を発信できるwebアンケートと、子どもが自分の思いを人とコミュニケーションをとりながら発信できるワークショップ双方の活用が求められています。

【他自治体事例：東京都】こどもワークショップの実施

東京都は、子ども政策の充実を目的に、小学生から高校生までの子どもが都の施策について意見を出し合う「こどもワークショップ」を実施しています。テーマごとに複数回開催され、子どもたちがグループで議論や発表を行い、その意見は都の担当部署に共有されます。子ども自身がまちづくりや政策に関心を持ち、行政に声を聞ける機会として継続的に行われています。

(1) 神奈川五丁目地区のまちづくり(都市整備局・教育庁・財政局)



開催日：令和7年6月1日(金)
開催場所：国連大学(渋谷区)



開催日：令和7年7月5日(土)
開催場所：多摩動物公園(日野市)

参考：こどもワークショップ「子供の意見やエビデンスに基づく子供政策の推進」子供政策連携室

子どもが意見を出しやすくなる工夫

- 子どもが区に向けて意見を発信しやすいような工夫の必要性

子どもが答えやすく、興味・関心を引くようなアンケート設計(設問数の最小限化、回答例の提示、年齢・発達に応じた表記等)・デザイン(ポップなイラストの挿入等)・インセンティブ(景品の配布等)にも注力する必要があります。

また、ワークショップ等の対面の場合でも上記対応に加え、子どもが安心・リラックスして参加できるような雰囲気作りや進行への配慮は欠かせません。子どもの発達段階に応じた対応ができるような専門的な知見を得る必要があります。



・会場装飾



お菓子

(3) 区と子どもの双方向のコミュニケーションに向けて

子どもが区に意見を発信できる物理的な場所の創出

- 子どもが普段いる場所(居場所)で区と交流

子どもアンケートではワークショップなど意見を発信する会場については、子どもが行き慣れた場所を希望しています。また、友達と一緒に参加するという希望も多いことから子どもが普段から集まる場所において実施されることが望ましいです。

また、情報を区から受け取る際にも、学校や児童館など普段からいる場所で受け取ることも多く、区との情報における双方向のコミュニケーションが期待できます。

区は子どものニーズ・発達に応じた様々な居場所を用意し、職員が子どもの居場所に出向くことで子どもとより多くのコミュニケーションをとることができます。

【他自治体事例：東京都】こどもワークショップの実施

東京都は、様々な環境下にある子どもから意見を聴くため、子どもが日常を過ごす多様な居場所に足を運びアウトリーチ型でヒアリングを実施するなど、対話に力を入れて取り組んでいます。

参考：子供へのヒアリング「子供の意見やエビデンスに基づく子供政策の推進」子供政策連携室

子どもの意見聴取・政策反映に係るガイドラインの整備

- 子どもの意見を聞くことの指針やガイドラインの整備

本調査の分析を通じて、子どもへの意見聴取について区の職員が日頃実施するにあたっては、考慮すべきことが多くあることが分かりました。

また、本調査と同時期に実施した職員向け研修「子どもの権利に係る子ども等の意見の政策反映研修」において、受講した職員からも子どもから意見を聞くにあたっては全庁的な統一ルール(指針やガイドライン)などの整備を求める声が多数ありました。

今後、区が子どもの意見聴取・政策反映を推進していく上で、どのような時に意見聴取が必要なのか、どの手法が適切なのか、各手法を用いる際の注意点を各部署が理解し適切に活用できるよう、千代田区版子ども意見聴取・政策反映ガイドラインの整備を検討する必要があります。

【他自治体事例：中野区】「子どもの意見表明・参加に関する手引き」の策定

中野区では、令和4年4月に「中野区子どもの権利に関する条例」を施行し、条例の趣旨を踏まえて、子どもにやさしいまちづくりを進めており、区政運営における子どもの意見表明・参加を促進するため、子どもの意見の聴き方や留意点などを取りまとめた「子どもの意見表明・参加に関する手引き」(令和6年3月)を策定しています。

この手引きは、区政運営において子どもの意見表明・参加の取組を進めていくにあたり、各部署が取組を行う際の参考として活用することを目的として作成されていますが、中野区では、区政にとどまらず、家庭、学校、地域など、日常のあらゆる場面で子どもの意見表明・参加が保障されるよう、仕組みづくりや機会の確保に向けた取組にまで広げて、活動を行っています。

参考：子どもの意見表明・参加に関する手引き | 中野区

4 今後の方向性

(4) 子どもの居場所づくり

子どもが区に求めている居場所とは

●区がサードプレイスを整備する意義

本調査結果からも千代田区の子どもの十分に居場所を持っていないことが分かりました。特に、とりわけ厳しい環境で育つ子どもは、居場所を持ちにくく、失いやすいと考えられることから、喫緊の課題や個別のニーズにきめ細かに対応した居場所をつくることで、子どもの権利を守り、誰一人取り残さず、抜け落ちることのない支援を行う必要があります。

また、価値観の多様化やそれを受け入れる文化の広がりに伴い、多様なニーズに応じた多様な居場所が求められるようになっていきます。区は子どもたちと継続したコミュニケーションをとり、ニーズの変化を見逃さない取組みが求められます。

●子どものニーズに応じた居場所の整備が求められている

子どもアンケートにおける自由記述を分析した結果、子どもが求める機能として、「勉強できる場所」「ボール遊びができる公園」や「スポーツ専用施設」を求める意見が多くあり、保護者からは「勉強できる場所」「体験学習ができる場所」などが求められています。

また、細かくみていくと勉強できる場所についても「静かに勉強」「友達と話しながら」「大人などが教えてくれる」など様々なニーズがあります。そのため、居場所に特化した調査を実施し、地域性や発達を踏まえたニーズや区が提供できる・しているリソースについて整理する必要があります。

中高生専用の居場所の検討

●年齢が上がるにつれて居場所を失う傾向

子どもは年齢が上がるにつれてできていることが増える一方で、大人から求められることも増えます。そういった日々のストレスから解放されてリラックスして過ごせる場所を求める傾向にあります。特に千代田区においては、子ども部屋がそもそも無い家庭も多くあることが分かりました。そのため、区内の中高生は自宅でもひとりで静かに過ごすことができないため、子どもが一人でリラックスして過ごせる環境の整備が必要です。

●中高生専用の施設の必要性

区内の児童館において中高生タイムの実施は行っています。しかし、児童館は小学生がメインユーザーであり、掲示物・備品をはじめ館内の様々な仕様が小学生向きとなっています。今回のアンケート結果の中でも小学校卒業以降の居場所の整備を求めている傾向がありますので、中高生の専用施設の整備について検討を進める必要があります。

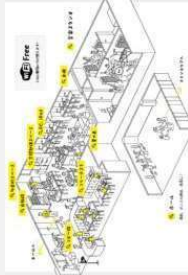
【他自治体事例：武蔵野市】武蔵野プレイスの運営

武蔵野市は、図書館・市民活動支援・生涯学習・青少年活動支援の4機能を併せ持つ複合公共施設として武蔵野プレイスを開設しました。年齢や立場を超えて人々が集い、学びや交流を深めることを目的としています。館内には読書スペースのほか、スタジオ、カフェ、ワークセッションルームなどがあり、学校の長期休暇の時期は中高生専用となるエリアもあります。青少年向け教室・講座、青少年自主企画事業など様々な取組みが行われており、市内の青少年が自らの居場所として感じて過ごせる拠点となっています。

参考：武蔵野プレイスの理念「武蔵野プレイス」

【他自治体事例：文京区】文京区青少年プラザ「b-lab（ビーラボ）」の運営

文京区は、中高生が自由に過ごし、学びや挑戦ができる居場所として青少年プラザ「b-lab（ビーラボ）」を開設しました。音楽スタジオやホール、勉強スペースなどを備えており、学校や家庭に続く「第3の居場所」として、地域と若者のつながりを深めています。中高生の居場所づくりにあたり参考になると考えられます。



参考：ビーラボ (b-lab) 文京区青少年プラザ

●保護者は、大人の関与を求める声が多い

保護者アンケートにおける自由記述を分析した結果、子どもの居場所として、「大人の監督がある施設」を求める意見が多くありました。子どもの安全の確保に加えて、子どもよりも上の大学生などの交流や様々な体験を希望しています。

新たな子どもによる居場所を検討するにあたっては、子どもの安全の確保はもちろん、様々な大人による勉強やスポーツ、体験に係るサポートを得ることでより満足度の高い施設になることが期待できます。

子どもの居場所について整理する必要性

●子どもの居場所は様々な部署、地域団体などで展開されている

子どもや保護者が有する様々なニーズに応え、今後も居場所づくりを推進していくためには、庁内の関係各課や、地域で子どもの居場所づくりをされている区内の民間企業、社会福祉協議会等の関係機関との協力は欠かせません。子どもの居場所作りの必要性や課題を共有し、協力のうえ推進していく必要があります。

そのためには、千代田区における子どもの居場所に対するあり方を検討する必要があります。

【他居間事例】飯田橋まちづくり拠点「39 base」

民間企業により、飯田橋エリアに開設された「39 base」は、子どもから大人まで誰でも立ち寄れる「居場所」として機能しています。地域住民や学生、就業者が自由に集い、学びや交流、まちづくり活動等に参加できる空間を提供しており、地域のつながりと安心して過ごせる居場所となっています。



参考：39base

資料4 有識者会議資料（第2回）

ちよだリテラシー教育

令和7年度「ちよだリテラシー教育」の取組について

1 背景

S N Sなどの普及により情報発信・取得が容易になった現代では、自分の考えをもち、情報を正しく判断する力が重要である。こうした力を育むために「ちよだリテラシー教育」を推進し、特にメディアリテラシーの育成に力を入れていく。

2 目指すべき子どもたちの姿

「情報を読み解き自己の信念に従って行動ができる人」（千代田区子育て・教育ビジョンより）

3 育成する力

- （1） 善悪を判断して行動する力
- （2） 類似情報を比較する力
- （3） 事実と意見を区別する力
- （4） 批判的に読み解く力
- （5） 発信者の意図を考える力
- （6） 確かな情報を見極める力
- （7） 自分の考えを形成する力

4 学校での取組

- （1） 国語科を中心とした言語能力を育む指導の充実
- （2） 読書活動の充実
- （3） 資料やデータの見方・活用における指導の充実
- （4） 情報モラル教育の充実
- （5） A I など新たな技術の体験・活用

5 教育委員会及び学校のこれまでの取組

- (1) 目指す姿、育成する力、学校での取組を可視化（各学校は教育課程に記載）
- (2) メディアリテラシーに関する資料を整理・作成
- (3) 管理職向け研修
- (4) 児童・生徒向け実態調査
- (5) 各学校の「ちよだスマートスクールの」での授業公開、講演会等
- (6) 各学校独自の取組（外部団体を活用したセーフティ教室、ビブリオバトル等）

6 児童・生徒向け実態調査について（質問項目は裏面参照）

実施時期：令和7年5月8日（木）から令和7年5月30日（金）まで

対 象：小学校5～6年生及び中学校・中等教育学校前期課程の児童・生徒

結 果：○高い達成度が示された内容

インターネット上での配慮や自分の行動の影響

●今後重点的に育成が必要な内容

信頼性の高い情報の見極め、事実と意見の区別、情報を批判的に読み解く力

【質問項目】

小学校5～6年生	中学校/中等教育学校（前期課程）
善悪を判断して行動する力	
1. ネット上で発信するときに、相手を傷つけないための注意点を考えることができる。	1. オンラインでのコミュニケーションを図る際、適切な発信を心がけることができる。
2. 自分の行動が周囲にどのような影響を与えるか考え、迷惑をかけないように判断することができる。	2. 自分の行動が社会にどのような影響を与えるかを深く考え、責任ある判断をすることができる。
類似情報を比較する力	
3. 複数の方法を組み合わせて、どちらがより信頼できる情報かを考えることができる。	3. 複数の情報源を比較し、それぞれの特徴や信頼性を分析することができる。

4. いくつかの意見を比べて、自分が賛成できるものを選ぶことができる。	4. 異なる視点の意見を比較し、それらの背景や論拠を分析しながら、自分の立場を整理できる。
事実と意見を区別する力	
5. 「事実」と「自分の考え」に分けて文章を書くことができる。	5. ニュースや記事を読んだとき、事実と意見を正しく分けながら、自分の考えを書くことができる。
6. ニュースや記事を読んで、どこまでが事実でどれが意見かを見つけることができる。	6. ニュースや記事の中で、客観的事実と解説・意見を区別することができる。
批判的に読み解く力	
7. ニュースや記事などの情報を簡単に信ぜず、疑いながら読むことができる。	7. 映像作品や報道がどのようなメッセージを伝えているかを批判的に考察することができる。
8. 他者の主張や考えなどに触れたときに、矛盾点があれば指摘することができる。	8. 本や記事の論点を整理し、問題点や矛盾点を指摘することができる。
発信者の意図を考える力	
9. 作者や筆者、発表者の考えや意図を考えながら読んだり聞いたりすることができる。	9. 本や映像作品など、作者の意図やねらいを考えながら読んだり視聴したりすることができる。
10. 同じ出来事でも発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる。	10. ニュースや記事、人の話は、発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる。
確かな情報を見極める力	
11. インターネットの情報を正しいかどうか確認することができる。	11. インターネットから信頼できる情報を選ぶことができる。
12. 調べた情報の出典を確認し、信頼性を考えることができる。	12. 情報の発信元の違いを分析し、それぞれの信頼性について考えることができる。
自分の考えを形成する力	
13. 自分の意見を他の人に説明するときに、そう考えた理由もしっかり伝えることができる。	13. 自分の意見を論理的に整理し、他者に根拠を示しながら伝えることができる。
14. 他の人の意見を聞いて、自分の考えに付け加えたり新しい考えをもったりすることができる。	14. 意見をもった後も、新たな情報を踏まえて柔軟に考えを見直すことができる。

令和8年度リテラシー教育の推進

「ちよだりテラシー教育」の推進



①区独自のメディアリテラシー検定及び教材開発

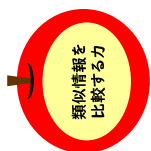


画面イメージ：状況判断編

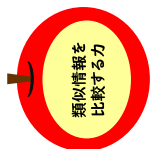
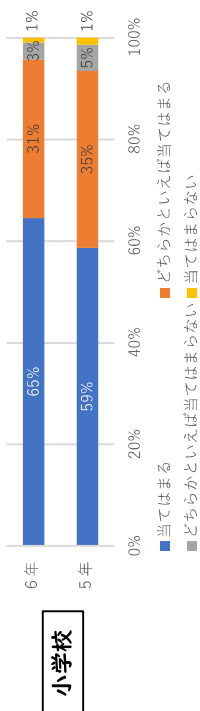
画面イメージ:個人診断レポート

② 小学校高学年から授業で生成AIを活用
③ 読解力向上ワークシートの導入
④ 子どもも新聞、中高生新聞を配架

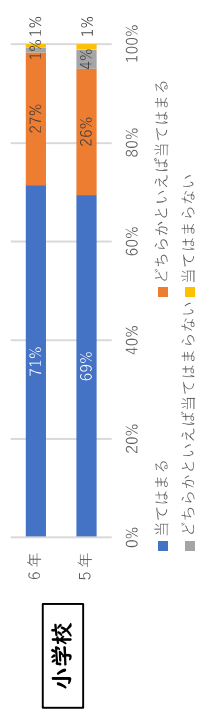
	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
①メディアリテラシー検定					●	→			→			
②学校用生成AIシステム「アイミー」					●	→	●	→				→
③読解力向上ワークシート					●	→						
④子ども新聞、中高生新聞	●	→				→	●	→				→



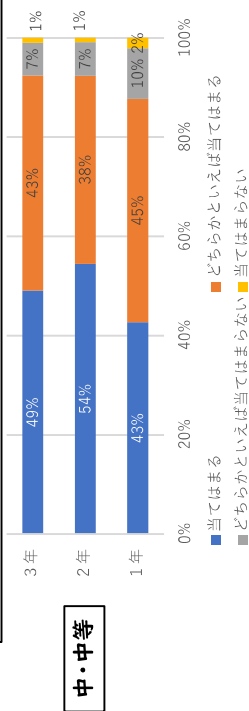
3.複数の方法を組み合わせ、どちらがより信頼できる情報かを考えることができる。



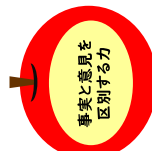
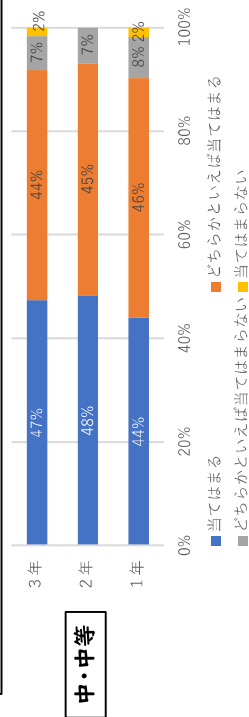
4.いくつかの意見を比べて、自分が賛成できるものを選ぶことができる。



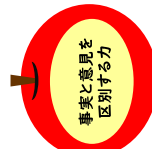
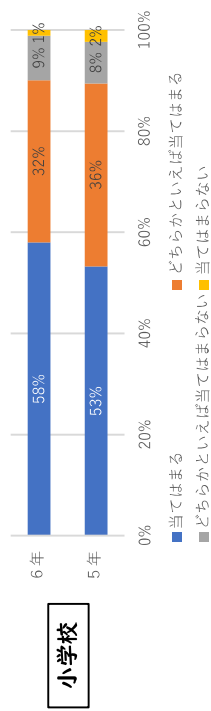
3.複数の情報源を比較し、それぞれの特徴や信頼性を分析することができる。



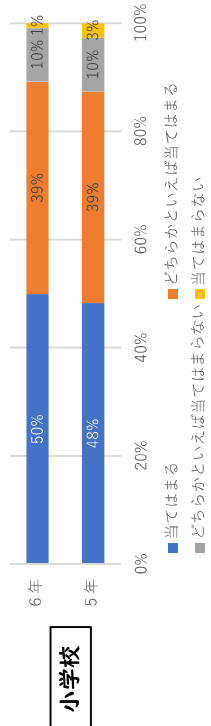
4.異なる視点の意見を比較し、それらの背景や論拠を分析しながら、自分の立場を整理できる。



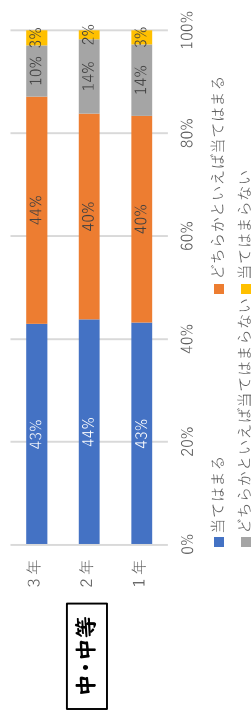
5.「事実」と「自分の考え」に分けて文章を書くことができる。



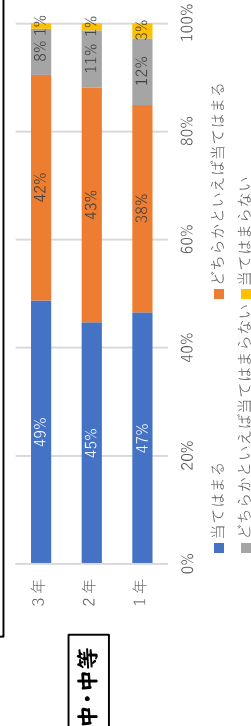
6.ニュースや記事を読んで、どこまでが事実でどれが意見かを見つけることができる。



5.ニュースや記事を読んだとき、事実と意見を正しく分けながら、自分の考えを書くことができる。

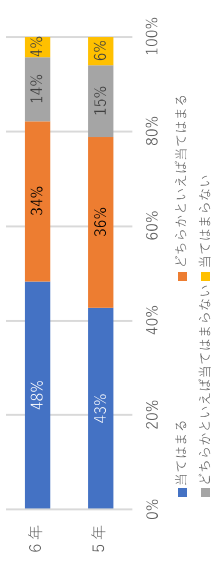


6.ニュースや記事の中で、客観的事実と解説・意見を区別することができる。



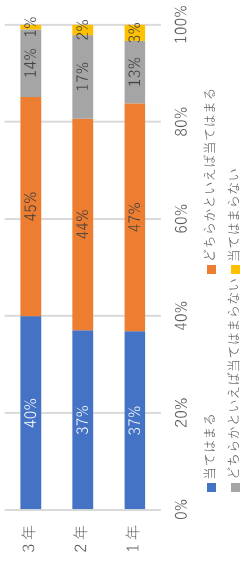


7. ニュースや記事などの情報を簡単に信じず、疑いながら読むことができる。

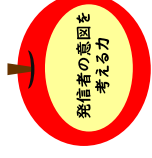


小学校

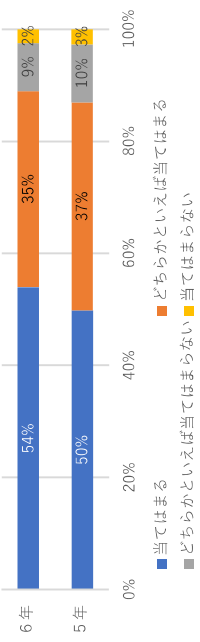
7. 映像作品や報道などのようなメッセージを伝えているかを批判的に考察することができる。



中・中等

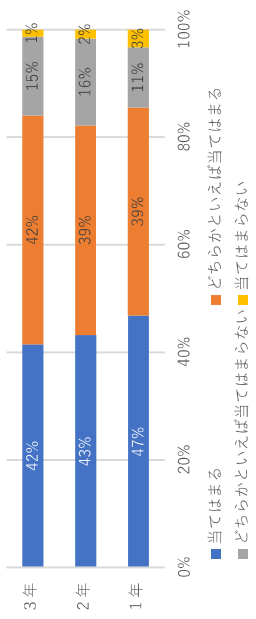


9. 作者や筆者、発表者の考えや意図を考えながら読み聞いたりすることができる。



小学校

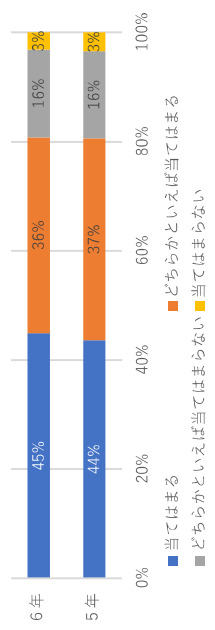
9. 本や映像作品など、作者の意図やねらいを考えながら読み聞いたり視聴したりすることができる。



中・中等

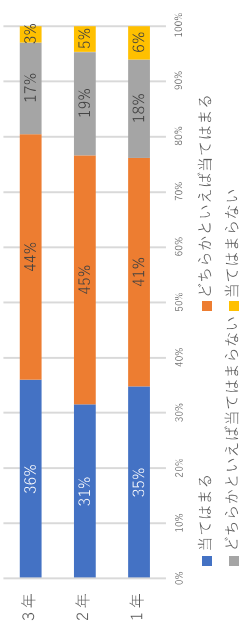


8. 他者の主張や考えなどに触れたときに、矛盾点があれば指摘することができる。

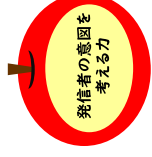


小学校

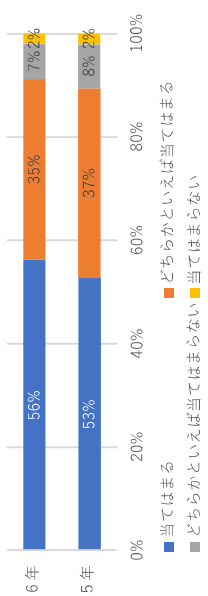
8. 本や記事の論点を整理し、問題点や矛盾点を指摘することができる。



中・中等

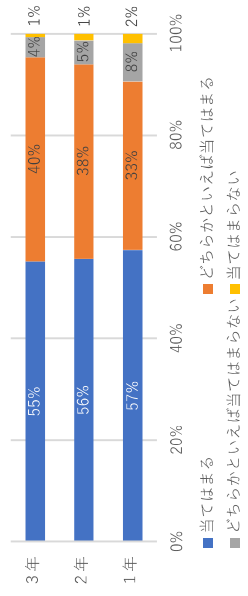


10. 同じ出来事でも発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる。

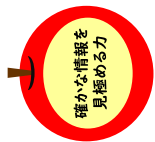


小学校

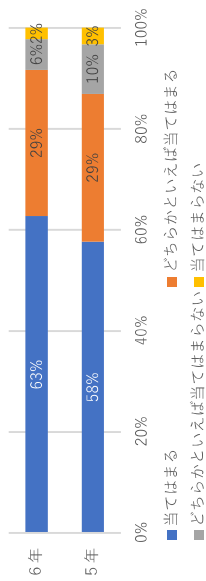
10. ニュースや記事、人の話は、発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる。



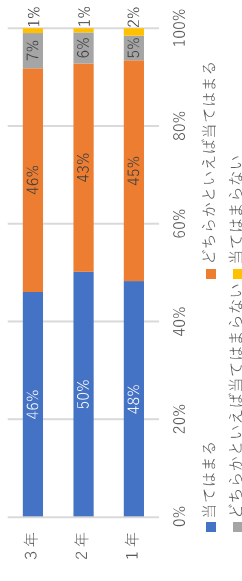
中・中等



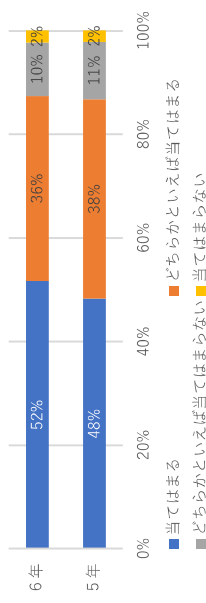
11. インターネットの情報を正しいかどうか確認することができる。



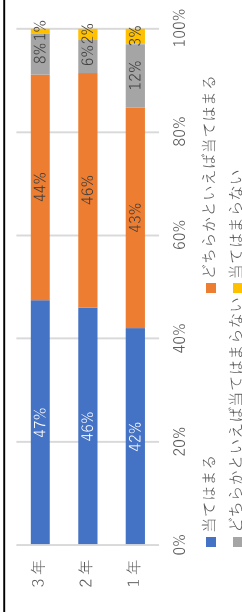
11. インターネットから信頼できる情報を選ぶことができる。



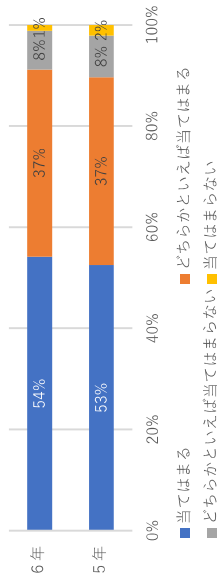
12. 調べた情報の出典を確認し、信頼性を考えることができる。



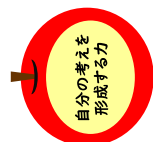
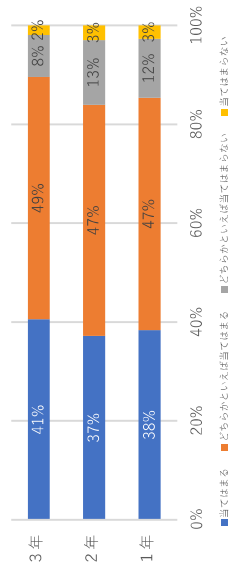
12. 情報の発信元の違いを分析し、それぞれの信頼性について考えることができる。



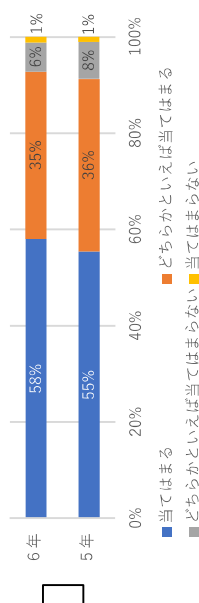
13. 自分の意見を他の人に説明するときに、そう考えた理由もはっきり伝えることができる。



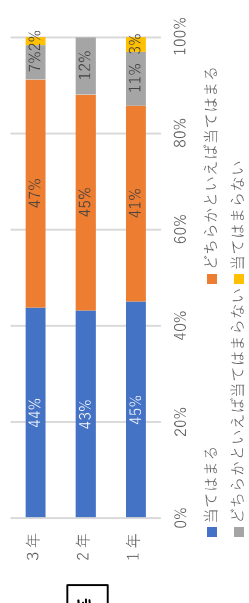
13. 自分の意見を論理的に整理し、他者に根拠を示しながら伝えることができる。



14. 他の人の意見を聞いて、それをもとに新しい考えをもつことができる。



14. 意見をもった後も、新たな情報を踏まえて柔軟に考えを見直すことができる。



実態調査結果の分析・考察

千代田区が目指す「情報を読み解き 自己の信念に従って 行動ができる人」の育成 に向けた、児童・生徒の現在のリテラシー能力について、調査結果から以下の点が読み取れます。

1. 比較的高い能力が示された項目：

- ・ **オンラインコミュニケーションにおける配慮（「ネット上で発信するときに、相手を傷つけないための注意点を考えることができる」など）**
 - 小学校5・6年生、中学校・中等教育学校のいずれの学年においても、「当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」を合わせると非常に高い割合を示しています。これは、オンライン上での適切な発信や他者への配慮に関する情報モラル教育が一定の効果を上げていることを示唆しています。
- ・ **自己の行動が周囲・社会に与える影響の認識（「自分の行動が周囲にどのような影響を与えるか考え、迷惑をかけないように判断することができる」など）**
 - 小学校5・6年生で 95～97%、中学校・中等教育学校で 92～93%が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答しており、自らの行動に対する責任感や配慮の意識は概ね高いと言えます。これは「善悪を判断して行動する力」の基礎が備わっていることを示しています。
- ・ **発信者の立場による伝え方の違いの認識（「同じ出来事でも発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる」など）**
 - 小学校5・6年生で 90～91%、中学校・中等教育学校で 90～95%が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答しており、発信者の意図を考える上での重要な視点である「発信者の立場」への意識は比較的高い水準にあります。

2. 育成に課題が見られる項目（特に注力すべき点）：

多くの項目で、特に**中学校・中等教育学校の生徒において「当てはまる」と回答する割合が小学校よりも低い、または学年が上がるにつれて低下する傾向**が見られ、より高度なリテラシー能力の育成に課題があることが示唆されます。

- ・ **確かな情報を見極める力（「複数の方法を組み合わせて、どちらがより信頼できる情報かを考えることができる」など）**
 - 複数の情報源を比較し信頼性を分析する能力については、小学校6年生で63%が「当てはまる」と回答している一方で、中学校3年生では46%にまで低下しています。また、「インターネットの情報を正しいかどうか確認できる」という問いでも、中学校の生徒では「当てはまる」が50%を下回っており、情報源の分析や信頼性判断は特に課題です。
- ・ **事実と意見を区別する力（「ニュースや記事を読んだとき、事実と意見を正しく分けながら、自分の考えを書くことができる」など）**
 - 文章中で事実と意見を区別して書く能力、またニュースや記事から事実と意見を見つける能力ともに、小学校で50%台、中学校では40%台と低い傾向にあります。これは、情報リテラシーの根幹をなすスキルであり、強化が急務です。
- ・ **批判的に読み解く力（「ニュースや記事などの情報を簡単に信じず、疑いながら読むことができる」「他者の主張や考えなどに触れたときに、矛盾点があれば指摘することができる」など）**
 - 情報の批判的吟味や矛盾点の指摘といったより高度な批判的思考能力は、全学年を通して「当てはまる」が50%を下回り、特に中学校では30%台と非常に低い割合となっています。生徒が情報を鵜呑みにせず、主体的に評価する力が不足している可能性があります。

- ・ **自分の考えを形成する力**（「自分の意見を他の人に説明するときに、そう考えた理由もしっかり伝えることができる」など）
 - 自分の意見を論理的に整理し、根拠を示して他者に伝える能力については、小学校で 50%台であるのに対し、中学校では「当てはまる」が 40%を下回っており、表現力と論理的思考力の不足が課題です。また、新たな情報に基づいて柔軟に考えを見直す力も中学校では 40%台と低い傾向にあります。

今後の取組に関する提案

上記の分析を踏まえ、「ちよだりテラシー教育」の目指す姿に近づくために、特に課題が見られた項目を中心に、以下の取り組みを提案します。

1. 国語科を中心とした取り組みの強化

- **「事実と意見の区別」を徹底する授業実践：** 新聞記事やインターネット上の記事、評論などを教材に、**客観的事実と筆者の意見・解釈を明確に区別する演習**を繰り返し行います [強化したい Q5, Q6]。児童・生徒が「なぜそれが事実と言えるのか」「なぜそれが意見なのか」を根拠とともに説明する機会を増やします。
- **「論理的な思考と表現」の訓練：** ディベートやグループディスカッションを導入し、**自分の意見を論理的に構築し、根拠を明示して他者に伝える練習**を行います [強化したい Q13]。他者の意見の論点や矛盾点を整理し、指摘する演習も取り入れます [強化したい Q8]。
- **多様な発信者の意図を考察する活動：** 同じテーマを扱った複数の記事や映像（ニュース番組、ドキュメンタリーなど）を比較し、**発信者（著者、製作者）の立場や意図によって伝え方が異なることを分析する学習**を深めます [強化したい Q9, Q10]。

2. 読書活動の充実と情報リテラシー教育の連携

- 「批判的な読解力」を育む読書プログラム：単なる多読ではなく、異なる視点やテーマをもつ書籍・情報を比較して読み解く読書会やブックレビュー活動を推奨します〔強化したい Q4〕。読んだ内容を鵜呑みにせず、**「なぜこの本はこのような主張をしているのか?」「他の情報源ではどうなっているか?」**といった問いを立てる習慣をつけさせます〔強化したい Q7〕。
- 読書後のアウトプットの多様化：感想文だけでなく、特定の情報や主張に対する賛否を論理的に記述したり、異なる情報源を比較して分析したりするレポートの作成を促します〔強化したい Q3, Q4, Q5, Q6〕。

3. 資料やデータの見方・活用の実践的な学習

- 「確かな情報を見極めるスキル」の徹底指導：インターネット上の情報（ニュースサイト、SNS、ブログなど）について、発信元の信頼性、情報の鮮度、他の情報源との比較、裏付けの確認など、具体的な情報検証プロセスを教え、実践させます〔強化したい Q11, Q12〕。フェイクニュースや誤情報の事例を取り上げ、見分け方を学ぶワークショップを実施します。
- 情報収集・分析のプロジェクト学習：生徒自身が興味のあるテーマについて、複数の情報源から情報を収集・分析し、その信頼性を評価しながら、自分の考えをまとめる探究活動を推進します〔強化したい Q3, Q11, Q12, Q13, Q14〕。

4. 情報モラル教育の「情報リテラシー」への深化

- 「相手を傷つけない」という発信側のモラルに加え、「受け取った情報をどう判断し、どう行動するか」という受信側のリテラシーを重視します〔強化したい Q2, Q7, Q11, Q12〕。情報の正確性を疑い、多角的に検証する姿勢を養うための具体的な授業内容を組み込みます。

5. AI など新たな技術の体験・活用を通じたリテラシー育成

- **AI 生成情報の特性理解と批判的評価：**AI が生成する情報（文章、画像など）の利便性と同時に、その**根拠の不明確さや偏り、誤情報の可能性**について深く理解させます〔強化したい Q7, Q8, Q11〕。AI が生成したテキストを検証し、事実と意見、論理の飛躍などを指摘する演習を取り入れます。
- **AI を情報収集ツールとして活用する際の倫理・限界：**AI を情報収集や整理のツールとして活用する方法を教えるとともに、**AI の出力は最終的な判断の根拠ではないこと、必ず人間が検証する必要があること**を強調します。

これらの取り組みを**学年進行とともに段階的に難易度を上げながら系統的に実施**し、教科横断的な連携を図ることで、生徒たちが変化の激しい情報社会を生き抜くために必要なリテラシー能力を包括的に育成していくことが期待されます。

九段中等教育学校における I C T 教育

九段中等教育学校では、生徒が学習活動において、情報や情報手段を主体的に活用する能力を育成することができるよう、タブレット型パソコンを整備し、生徒相互に話し合うための情報の共有や学習成果をまとめて発表するなどの活動が効率よくできることをめざして環境整備を以下のとおり進めてきました。

年度	具体的取組内容
令和 2（2020）年度	・ I C T 教育タブレット P C の整備 (G I G A スクール構想※)
令和 3（2021）年度	・ 実習室 P C（P C 教室 44 台、L L 教室 42 台）の更新
令和 4（2022）年度	・ 学校管理システム用サーバの更新
令和 5（2023）年度	・ 文部科学省実施の生成 A I パイロット校に指定（独自生成 A I 開発のための導入プロトタイプの開発・検証・活用の実施）
令和 6（2024）年度	・ 統合型校務支援システム導入及び I C T 教育用タブレット P C の更新、ゼロトラストセキュリティ、クラウド校務環境、校務用スマートフォン導入 ・ 独自生成 A I 「otomotto」開発（10 月より本格稼働） 引き続き生成 A I パイロット校指定（区内外への活用事例の波及活動実施） ・ 文部科学省実施の高等学校 D X 加速化推進事業実施校に指定（デジタル分野人材育成の先進的実践校としての実習環境の整備）
令和 7（2025）年度	・ リーディング D X スクール事業、生成 A I パイロット校、高等学校 D X 加速化推進事業指定校の継続（さらなるデジタル人材育成の充実を図るための環境整備と探究を軸とした数理・データサイエンス・A I を含むプログラムの実施、区内学校向けの公開授業や区内小中学生対象の体験講座などモデル校としての実践 ・ 独自生成 A I 「otomotto」運用 ・ P C ・ L L 教室の環境整備、実習室端末の更新 ・ 校内ネットワーク設備の更新
令和 8（2026）年度（予定）	・ 生成 A I の利活用の創出・普及 ・ 文理横断的な探究活動の推進（令和 7 年度活動の継続） ・ 生成 A I パイロット校、D X 加速化推進事業指定校

※1 人 1 台端末や高速大容量の通信ネットワーク等の学校 ICT 環境を整備・活用することにより教育の質を向上させ、全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現することを目的とした構想(令和元年 12 月文部科学省発表)